

J2.99:1

1 of 20

Feb. 1943 (1st Vol.)

67/14
C

ボス

文

丸

不

子

子

子



I have taken both pride and pleasure in the growth and fine activity of the Poetry Club. Among the many precious possessions brought to this continent by the Japanese, none is more valuable to the spiritual strength and beauty of our people than the distilled and disciplined forms of poetry: the poetic distillation of long experience. To conserve and further this process of distillation, this discipline is one of the purposes of the cultural program on the Project. I congratulate the Poetry Club on its outstanding contribution.

John Powell

序

後世まで傳はるやうな文學的作品は恵まれた環境の中からは
なか／＼生れ出ぬものだと思ふ。詩歌にしろ小説にしろ古今
の大作は不遇逆境の中から、またそうした不幸な民族の中か
ら数多く現れてゐる。文學にそんな定石があるとする。現
在のやうな、われ／＼の、この特異な境遇、変調な雰圍氣の
中からは当然相當な香^{（作品が現出しその香を匂といへば）}てたものが十七文字三十一文字の形が
らであらうと。また長詩や創作の統からであらうと。また
ストン文藝誌が発行された。種々な種の埋れてゐる豊饒な二
地へ灌漑が施されたと云ふ処だ。どんな芽が出て花が咲き、
どんなものが実るか。

豊饒を確く信じて水を延き
菅野大海

コミュニティーアクティビティ課長

2

ジモン・パウエル

私は文藝協會の立派な働きと具の發展とを歡び且つ誇りと
するものであります。

日本人に依つて此米大陸に齎らされた幾多の貴重なもの、う
ち詩の形式によつて傳へられた純粹と洗練、これ以上に我國
民の美感と精神力にとつて價值のあるものはありません。

長い間の経験に依つて得たところの詩的純粹さと其の鍊磨、
これを保持し更に發展せしめてゆくことは、我転住地に於け
る文化的事業の目的の一つでありまして、私は文藝協會の大
きな文化的貢獻に對して心から慶賀の意を表します。

開の地此処ポストンへ転住して来た。

国と国は戦へども我等はそれを避けて、此の人跡未踏の新世
界に相愛互助の協同社会を創り、人類の社会に最も美しい優秀
なる人間として、戦後、人類の爲めに貢献すべき使命を我等は
背負つて居るのである。

如何に辛くとも悲しくとも、互ひに慰め合ひ、勵まし合ひ、扶
け合ひつゝ、戦後のよりよき世界に於て聖なる人道の戦士として
大いに奮闘進歩する其の榮ある機会を期待しつゝ、我等は誠実
と愛との溢れた道徳的美に輝くポストンを建設して行かうでは
ないか。

こうした特殊な新しい協同社会に於ける藝術、特に文藝の仕
務は重且つ大である。理性よりも遙かな偉力を以て、人間を力
かすものは感情であるからだ。そして文藝は多種多様な作者
の感情を讀者に傳へ、其心を讀者に感染せしめる大きな感化力
を持つてゐる。

今度、我等がポストンに多数文藝愛好者の協力と石川、矢形
両先輩の御盡力とに依りて『藝苑誌』ポストンが創刊される。新社
会の道徳、生活原理たる協同精神、泳養の有力なる一機関として
第一歩を踏み出したことは敬ばしいことである。我等文藝愛好
者は今後本誌を反とし、且つ師として協力社会ポストンの建
全なる精神、生活建設の爲めに盡力して行かう。

三行目 *實を結ぶ理想的社会生活の原理であり、相愛互助の精神を体得した
へつづく

創刊を祝して

4

松原信雄

(はたもなき畠野の草のただ中の鬬體と
貫きて赤き百合咲く)——石川啄木——

人類の歴史は戦争と平和との交互反復の連続である。然し原
始共産制、奴隸制、封建農奴制として資本制へと人類は唯進歩
の一路を辿つて来た。即ち、野蠻、未開、文明がそれである。
現在の戦争、それは人類により高度なる超文明社會への飛躍を
約束してくるものである。と私共は解したい。少くとも鬬争
は進歩の母である。といふギリシヤ哲人の言葉は、私共を勇氣
づけてくれるものである。

新世界に憧れて、五千海里の海を越え渡つて来た此処大陸ア
メリカ！。異なる言語と風習とに隔まされながらも、彼々營々
未開の畠野を開拓し、米國農産業界の平和的戦士として貢獻し
てきた。彼と血と汗の奮闘の幾十年。次第に此の國の言語と風
習にも同化し、子を育て、財を積み、愛する子女の故郷此の米
大陸を墳墓の地と定め、平穩に恵まれた老後の生活を約束され
たことを歎んだのも束の間、戦争はそれを一朝の夢と化し、慘
憺たる辛苦に堪えて開拓した彼と血と汗との結晶、牧子の如く
愛着を感じる農土、又、第二世子女にとつては、母の如く懐し
い故郷である土地を後に、一世も二世も相共に手を携えて未開

ある事を痛感せしむるに足る。特に我が一世の大半英語の素養に乏しく運動競技に興味を待ち得ざる者が民族本来の藝術的趣味に近づく事が出来なうならば日常の生活から精神の建て直しを如何に開発すべきであるか私共は同趣味の文獻蒐集によりて斯道の向上を計り文藝獨特の心境を獲得したい。そして同時に此提供によりて公衆一般の日常の慰藉者たる人事を期するものである。茲に各文藝同好の諸士に支援を請ひ創刊の辞に代へる次第である。

一九四三 二月初旬

北米合衆国アリゾナ州ボストン転住地に於て

矢形 溪山

責任の椅子に素養を訊る

○目指す峰唯一つなりまゝ進む
○手を握り聲を協せて歌ひつゝ、けらから我等共に生きなむ。
(昇平)

發刊の言葉

今や世界は擧げて動亂の波に揺られゐる。
大風一過、巒頭の巨浪の爲め吾々在米同胞は轟々たる浪音を腦裏
に深く印しつゝ、茲に……

嗚呼、数十年の苦闘の結果は今やあとかたもなき一沫の水泡
に期し、双鬢に霜を戴ひてか弱き妻子を携へ朦朧たる雲霧の彼
岸を微かに沈黙の生活に懊惱を押へて……生の辿りを續けて
居る。正に人生の悲慘事である。

歴史は繰り返す！ 繰り返す毎に世界は進歩し向ふし如何なる
出来事も終局は破壊にあらずして建設である事は創世の意義
から信ぜねばなるまい。けれども其建設も向上も世界人類一人
一人が其環境から超越し明瞭に時局の真髓を指摘し之れに適合
する心境動作を探つて個人より社會に、積極的奮闘によりて初
めて之れが進歩すべきである。

今や吾々は此の深刻なる在米同胞の直面せる不可抗事
によりて日々頭脳一つ、ある有形無形の現象に對して之れを救済
し之れが指導に助力する事が刻下の吾々に課せられたる任務で

歌ホ
壇ストン

[illegible]

歌友の告白

既に歌会亭上で諸君に御紹介して置、た如く今回吾々の先輩である泊良彦氏(氏は北米歌壇の随一人あり又祖国歌壇に於ても重宝なる其の甲斐も成す人である)の手によつて歌集現代秀歌選抜が近々の中に出版される事になつた。大事件発生以來殊に收容所生活に入つてからの吾々は邦語の讀物に大変縁遠くなつてゐる特に歌集の如きものは全く購ふ事も不可能で歌を學び度くとも参考書が無くて困つてゐる現状である其の言ひ点を大変不図に思ひ下さつて執筆されたのが此の現代秀歌選抜である内容は現今祖国歌壇に於て他大に評してゐる大所の人々一七七氏の作品より三四の首を採録此の嚴選を見ても如何に先生が苦心されたかと言ふ事が同はれるのである。先生は毫も堂利の野心をもつて此の書を出版されるのではなく實費で吾々に頒た人と言ふお考へから頒布と言ふ方法を採用される事になり今其の豫約の受付を開始されてゐるのじある全部で百五十乃至二百部位しか印刷されたいとお考へてあるから当ホストンの歌友諸氏も後々なりたい中に宜しう豫約申込みをされる様お進めする既に小生の許まで甲込まれてゐる方々もあるが尚ほ直接先生の方へ申込み度い人々もあるだらうから便に先生の御住所も記して置く 永瀬生

Mr. TOMARI, Mr. D. J. SMITHFIELD, CHICHESTER

上らむと友をとおで来し岩山は春まだ浅く寒むき日のてり。阿部 秋野
はしゆやしと女の友は石山に五色の石をいれぬ。

ヨモ 四方の人等寄り集まれるこゝ故に思ひもうけぬ友にあふなり。
朝夕の寒さはいたく身に沁めどま晝間は暑く汗ばむ。

砂源も人星らしゆうなりけり烟作られて菜の花の咲く。よ
去年の秋植ゑて安でつる度の本の今朝の寒さにしほれ果てけり。
望月 みどり

病床吟

ゆき行けど制所の道は涯もなし寂しかれどもいた歩みゆく。
百千度の我れ躑躅がば百千度の起ちて歩まむ終ひの日にまで。

巖山を四方に圍らすアリゾナの曠野の邑に黙々と生く。高橋 康民
安本 時子

薄暗き電燈の下に更くるまで書読む吾子の背の廣さはも。

あらたまの春立つ今日は冬枯の林あたゝかく風なきにけり。山本 酒川
北林 利恵

遠近の夕餉をつぐる鐘きけば収容所の一と日は暮れにけるかも。
花の母の病ひは篤し柳笛の夫の帰る日せちにまたる。

文藝協會オム回歌会詠草集

一月三十一日催ス
順序不同



石川庄藏

同胞が拓^{ヒラ}きし砂漠^{サハコ}の菜園に小鳥群れ飛ぶ朝のどけさ
収容所の此処にも冬はめぐり来て木枯寒し砂塵吹き上げつ

貴家しま子

収容所^{コウコウ}にしてもかへしからに元旦のほぎこ
いづれにも理わりあれば子等の上には是水も定めたみ幾日か狂ぬ

森すみ子

再會の日を約しつゝコロラトへおでゆく友と堅き握手す
背と歩ゆも曉の入江の水際べに白鷺一羽身じろがず居り

大原流葉

人々のねむり未だもふかければ朝餉の鐘もつく手たぬらふ
走ひの身を枕にすがりて行く人に埃あびせて野分き吹く見ゆ

土田親良

乙女子が笑みつゝもてる一と枝のミストーベリは誰に見すとや

赤星と

来る年に望みをかけて堪へゆかば安けかるべし
赤星と

綾織謙介

門松も御旗も立てず年近ふ家並に初日寂しく照れり
冬の日の日射し明るささ庭べにのびよい咲ける白水仙の花

バラツクの屋根吹き越ゆる風はげしく荒磯アサノよもす浪音の如し

島原潮風
竹下ゆづる

うば玉の夜空曇り吹きはれて光さやけき月あらはれぬ

松原信雄

エ、ビーアイが父を伴ひゆきたりと友の幼な兒さりけなく言ふ
もう幾つ寝たら歸るかと幼な兒は父を待ちわび母泣かすとよ

柴田よし

故郷に吾が無事つげよ鳥汝は天翔りゆく翼もてれば

清時文子

冬日さす畑の畦道に日向葵は花うなかぶし枯れて立てれり

櫛山保基

洗濯スヤする度毎吾れは思ひ出で、亡き妻の上を恋ひしのぶかも

安高きち

明日の事は明日計らむ今け吾れは今日のつとめにべストつくすべし
食前に祈り捧ぐる幼な兒の小さき両掌を合せたる見つ

永瀬勇

梁木リョウキに蜘蛛の巣白く埃づきこゝのたつきも六月へにけり
茄子の木に藁かゝぶせていたわれば霜ふる冬となりにけるかも

柳本錦子

そこばくの香に立ちながらスナトピーは冬を暖き庭に咲き初む
さ庭べに咲き盛りあしスナトピー一夜の霜に枯れ果てにけり

立ち昇る初日おろがみ同胞に幸おほかれと吾れは祈るも。
宮地溪川

谷津いはほ

水すみし池の底ひの大き魚たゞに身じろがずさむきこの朝。
埃立つ風なぎたれば夕べはやく露天映画に見等いさみゆく。

宮村一雄

小庭べの花をながむるひと、きは吾がひぐらしの小さき幸なり。
母を呼ぶ夢にめざめてこの夜半を窓にさびしき星を見つ。

内堀山人

春の日のま晝のどけし牧原に草食む牛の首のベル鳴り。

原進

戦場にあるつはものくらぶれば此処の生活はいたと安けぬ。

牟田静子

母の病む便りとびきて吾が心がかねまゝに年明けにけり。
ゆきずりにさゝたる人の国なまり耳に親しくなほ残り居り。

児玉な枝

ニ世等のこゝに育ちて禮知らぬ嘆きは持てど言はずあり經む。

原とみ

日の光りとぶかぬ庭の常蔭に育ち後れし草花の苗。

鈴木木仙子

あかねさす雲の中よりあらはれて一とつらの朝空をゆく。

鈴木朝空

な愚生が臆面もなく受持つた訣である。次回は誰か外の会員の
人にお願ひせねばならぬかと思ふ。であるから今回の此の添削な
り取捨に對して不満を感じられ方があるならば其れは愚生の
責任であるから其の方の抗議は全部愚生の許まで申し越され度
い。住所はブラック十八ビルディング十二ノDである。
尚ほ後記が些か長くなる様であるが今一言言ひ添へておき度い
事がある。其れは諸君毎月の歌會に折角あゝして出詠されるの
であるから歌會当日は万障を繰り合はせ是非出席して頂きたい
と思ふ。歌會も先月をもつて既に五回目の会合を催した其の間歌
の投稿はあつても未だ一回も出席されな人か。勿論中には病床にあつて出
席不可能の方もあるが其う云ふ人は又別であつて只多忙だから
出られないと云ふ人は何うかと思ふ。
實際自分が歌に興味を持ち歌に信をおいて作歌しておるのであ
るならば月一回の其れも日曜の午後半日位ひを歌に費せたい事
はないと思ふ。又折角作歌するならば其の位ひの熱意はあつて
欲しいものである。只たはむれに歌を詠んでうんにも推敲せず
其のまゝ歌會の方へ投稿の後には良からうと思ふ。然らうと頓着なく
歌會の人任せにすると思ふ事はあまり無責任ではなからうか。殊
に其う云ふ作に限つてつもらぬものが多々様に見受けける。今更
ら云ふまでもない事であるが。歌は人の為の様に人に見せる為
めに詠むものでけなひ又面白半分に人の為の様に詠むものでは

後記

見だ潜越なり。さういひかゝ思つたが折角紙上に発表されるのであるから、と云ふ諸君の意見に従つて自分の非才なる事は願はず。此処に諸君の尊ひ作品に對し添削並びに取捨を試みることにした。作品は或る二三のものを除く外は全部先月の歌会に諸君より出詠された約七十首の中より選したものである。出来れば全部の詠草を掲載し度いと思つて努力して見たが中には何うにも加筆の施し様のないものも幾つかあつたのでそんのは遺憾ながら捨てるに餘儀なくされた。勿論採つたものも殆んど筆を加へぬものはなかつた位である。又何うにもならない物も或る事情の下に採らなければならなかつたものもある。今更ら歌の添削の如何に難しかと云ふ事を痛感させられた。添削したからと言つて其れで其の歌が完成したかと云ふと其うでもない、其れは原作よりはいくらか見良くなつたとは云へるが今繰り返して讀んで見ても未だもの足りない感のする物が大分ある。然し添削も作者の原作をあまりきづつけない程度に行はなければならぬと思つたから根本から改作する事は些か遠慮した。此の点良く諸君の御諒承を願ふておく。前にも述べた如く諸君の尊ひ作品に對して添削など出来る愚生ではないのであるが誰か先頭に立つて吾々を指導して呉れる人の現はれるまでは斯うして吾々仲間の方で出来る限りの事はやつて行かなければならぬのであつて言はゞ其の皮切りを微力

創作

仔狐

樋江井 良二

寒い月夜の晩だった。冷い風は厳しく砂漠の世界を狂はす。飢え疲れた仔狐は餌を求めあてもなく、叢林を彷徨し歩いた。四日間何も食べない仔狐はふら／＼と今にも斃れんばかりだった。生後幾ヶ月も経たない仔狐には食物を求める術もまだ知らないのだった。

親狐は仔狐を置いて餌を捜しに行つたまま、もう四日間も歸つて来ないのだった。カヨテに追はれて死んだのだらうか。いや／＼他の野獸に敏捷な親狐がカヨテの獲物になる筈はない。とかれはおぼろげに信じるのだった。人間の罠に落ちたのだらうか。こう思つただけでも仔狐の身体は恐ろしさにふる／＼ふるへるのだ。いや／＼自分のおやに限つてそんなことが、彼は自分に固く言ひ聞かせるのだった。それ程人間の「罠」はかれらの仲間にはおそれられてゐた。カヨテなどの野獸は人間の罠にくらべれば物の数ではなかつた。かれらは夜中注意に注意を重ねて餌を獲りに歩いた。人間の住む方には決して行つてはいけな。と仔狐は日頃から嚴重に言ひきかせられてゐた。人間をかつて見た事のないか。ルらには無理からぬ事だつた。動物ばかりの樂園だつた此の叢林も人間が荒し始めてからは總てが地獄の世界に一変した。こちら半年の間にかれらの仲間はずいぶんと減はれ失はれて

ない。歌は周知の如く各々自己の精神修養の爲め、つまり自
分の日常の生活状態を客観するに於ける餘裕のある心を養ふ爲め
に學ぶものであると愚生はつねに其の信じてゐるであるから若
し諸君の中に面白半分の気持ちで歌を詠んでゐる人があるなら
ば其人な人は歌を詠む事をお止しなさいと注意したい。何故なら
ば斯様な人は何日まで経つても上達しないし又眞面目に勉強し
てゐる人々の邪魔にもなるからである。諸君歌の道は上れば上
る程峻しいものであつて其して又何処まで行つても限りのない
ものである。言はば一生涯の努力を要して尚ほ足らずとするもの
である。故に良く其の辺の覺悟はあつて作歌に不斷の努力を續
けられん事を望んで熱望するものである。長々と駄文を草して
此の貴重なる紙面を費した事を協会員諸兄姉にお詫びしつゝ、筆
を擱く。

四三、二八、記ス

永瀬 生

次 回 歌 会 豫 告

歌稿締切り 来る二月二十日嚴守 一人二首を限度とす。
歌会は来る二月二十八日午後二時より第四十六ブラック
レクリエーシヨホールに於て催す。

知った。か水の最も恐れる敵が襲つて来たのだ。彼はたゞ夢中
だつた。うろたへるばかりだつた。愚にも親狐があれほど注意
した人間の住居に何時の間に来たのだらう。後悔してもおそか
つた。疲れ果てた仔狐の脚は思ふやうに動いてはくれない。
か水の顔から冷い汗が流れた。仔狐は突然背上にづくんと何か
打下されたのを感じた。かれはくらく／＼とした。たまらない
痛みを感じる。彼はあせつた。逃げた。再び後脚をはらはれた。
ひしひしひし。仔狐は宙に飛んでひっくり返つた。ほきつと
片脚が折れて、真赤な血が流れた。かれは次第に朦朧として行
つた。恐ろしい人間の顔の印象のみが深く彼の頭脳に刻
みこまれた。母親の悲しい泣き叫を感じた。身体
のど氷程たつたか、仔狐はかすかに意識を取り戻した。身体
のいたみを感じるには仔狐はあまりにも疲労し過ぎてゐた。
折断された後脚の傷口はどす黒い血で土まみれに固まつてゐた。
仔狐は彼が人間の作つた檻に入られてゐるのを知つた。彼は
呻きも蹴きもしやうとは思はなかつた。脚元には肉の塊が置
てあつた。食べたくもなかつた。若し仔狐が元の如く元気だつ
たにしても、恐ろしさと憎しみの興奮で、此の目前に置かれ
てある肉切り水を決して食べはしなかつた。親狐もこころ
にしてきつと何処かに回されてゐるに違ひない。かれは突然は
つとそう思つた。人間は何か何故俺達をこんなにいぢめるのだ
らう。人間は何と恐ろしい種族なんだらう。仔狐の意識は

いつた。獲物もなくなつていつた。人間の見えない山奥へ山奥へとかれらは次第に避難し始めるのだつた。減少してゆく自らの種族と、小さくせばめられてゆく野獸の世界を目のあたりに見つめる仔狐の親はたゞわけもなくあせり悲しむのみだつた。かれらとて生きて行かなければならない。食つて行かなければならない。彼等は夜になるとそつと穴をぬけだして、注意深く餌を求め探すのだつた。然し空手で歸る夜が多かつた。仔狐の栄養不良になつて、次第に痔せ細つてゆくのを見る親狐は悲しかつた。親仔三匹死にもせず、いまだに生存して行くのが不思議に思へるほどだつた。自由を獲り得る事の出来る仔狐がもう少し大きくなり、自由に餌を獲り得る事の出来るやうになるのを待ち、敵の少ないすつと山奥へ転住しやうと父狐はひそかに考へるのだつた。風は益々冷くなつて來た。夜は次第に更けて行く。哀れな仔狐は今にも死ななばかりに疲れて來た。母親のあた、かい懷がひしく、と悲しい。仔狐は母親を力一ぱい呼んで見た。然し声は枯れて出なかつた。あたりは風のひゆう／＼と飛ぶ音のみだつた。かれはふら／＼と歩いて行く。音はだん／＼と近くなつて來る。かれはちつと前方を見詰めた。かすかに物のうごめきが見える。次第に近づいて來た。仔狐はそれらが人間であることを直感してはつとした。かれは身近に危険の迫るのを

藤蔓はきれた。そのはずみの勢ひが余つてハツシと私の差し
伸べてゐる花の手首にあたつた。腕からは不思議と血は流れ出
なかつたが、中の肉が黄色を見せて大きな口があいてゐた。

其時の傷である。
疵も大方癒りかけてから、其の友達が云つた事を今も覚えてゐ
る。

「ハットあたつたと思つたからしまつたと思つて、そう思
つた所でとめた。剣道の達人はやはり違ふものだ。若しそれ丈
の腕前が俺になかつたら手首は切り落されてゐる筈だ」

その言ひ草が氣に障つた私は新慍に堪えない程激しい憤りを
覚えた。けれども私はそこをジツとこらへてゐた。

傷を受けても私は泣かなかつたのは確かである。併し、小さ
かつた頃だとは思ふ。年は覚えてゐないが、家に歸つて疵藥を
搜したが見付からないので叔母のある田圃まで歩いて行つた。

すると叔母の言葉は又異外だつた。
「友達から怪慍させられたのだから、その家の親に云ふて

藥を貰ひなさい」

いくらなんでも私はゆく勇氣がなかつた。私は厭だ。この儘で
いゝと答へた。私は母のゐないのが急に情なくなつて泣きたく
なつた。日は西の山にもう沈みかけてかうくした光を大地に
浴びせてゐた。時折り襲ふて来る夕暮の寒気と寂しさに疵が
ちく／＼痛んで來た。

再び朦朧として行つた。苦しい母親のうごめきを感じながら。
翌朝仔狐は檻の中で丸くなつて死んでゐた。(完)

創作

藤の花

眞隅田 幸

私は丁度腕時計をあてゐる個所に三日月形の鎌疵がある。
歸米早々母は直ぐ気が付いて何うしたのかと聞いた。

「わたしがある時分はそんな疵はなかつた筈です」

私は非常に當惑して返答が出来なかつた。幼い頃、山に馬の

鉢を切りに行つた時の事である。確かに野道の草もない時節

だつたらう。私は其点を判然り記憶してゐないが、竹の葉を草

籬に沢山盛つた。処が、ふと上を見ると、竹や木々に絡み上つ

てゐる藤の花が美しく壁下つてゐる。その紫色が反逆と何と

なく氣に入つた。取る事に相談が決まると、私は花手を差しの

べて藤蔓をひいてゐた。執拗にからみついてゐる藤蔓をひい

てゐる事は子供の手には容易な事ではなかつた。けれども心の

では、彼は年上だし、趣のあるやうにタンと取つて呉れるもの

と彼が命ずる儘にジツとして待ちながら心のとよめきを感じて

ゐたのである。

彼は、出来る丈葉も余計につけて上の方から切うと欲ばつ

て大きな図体をのばして鎌をかけて引いた。

新俳句

櫛田九平

加州の巖山の頂上にアリゾナの朝日照らし初め
根本のこぶ磨くや南国の冬の陽
彼方此方アイオンウッドの手入れ冬の日暮る
今年雑煮祝ふフオークで餅を引つかける
水涕アイオンウッドの家路に重き足どり
各々屑木の家具を作り火鉢もあり

櫛山四門

ふり降る雨の夜の家々どす黒く据りをり
シワの湯気の埋の六吠の吾子の胸ゆたか
霜枯れの中の一聯はギヤベゲにして青し
人々さまじくな木細工の目なたにして
四方は岩山の此処にも水ありて釣人う

竹 木次 偏里

菜の花畑一面を廣げ春雨
伏犬偶々来て子等部落をけしやき
朝顔つり下げてあり霜枯た軒
飛行機低う飛ぶわたしら太根畑の上

叔母は私をその友の家へ連れて行つた。叔母が後で隣家の人
たちに

「家に誰もゐなかつたら、怪慥させたその家の親に言ふてす
ぐ薬が付けて貰へない。意気地がない……」

と笑つて話してゐるのを聞いて私は少々腹がたつた。

叔母はそうして友の親に薬を付けさせて説を言はれたので大
分腹がないだらしかつた。私は其の時の不快な出来事を思ひ浮
べながら母に説明しようとしたが思ひと違つた。

叔母が言つたのは厭な言葉であつた。母からも何か言はれは
せぬかと思ふと急に何も言ひたくなかつた。終ひには自分の子
供が怪慥させられたと思ふと兒の對敵を増む氣から母は何を言
ひ出すか解らない。と云ふ氣がして來た。友が傍にゐないの
に、その出来事を説明するのは、會話が幾分自分に有利な場合
が多いやうに思はれた。私は友達に蔭で少しでも悪く言はれた
くないと急に思つた。私は不思議と友人をかばふ氣持が起きた。
友達と言ふやうに彼が若し剣道の達人でなかつたら、私は腕
を切り落されてゐる。さう思ふと今もソツトする。併し、
友達は高等科の一二年生だから、勿論達人ではないが、……
神様が良いやうにして下さつたのであらう。

(完)

出世の俳句

鉄相内田信也氏は、去冬の臨時議會から、鮮かな政治的
手腕を連発して、めつきり男を牽けてゐる。氏がまだ
今日ほど有名でなかつた頃、時の政友會總裁犬養木堂翁に
認められた勤機と云ふのが、なか／＼面白、
先年犬養木堂は、信州富士見の別荘で散歩中、足をすべら
して、尻餅をついたことがあつた。
それが重態と報ぜられ、何百の黨員、何千のお出入り、
綾萬のファンから、見舞品のや手紙が殺到し、政治家達は
踵を接して押しかけた。
この時に當つて、内田氏は、手紙も書かず、見舞品も贈ら
ないで、一通の電報に妙な俳句みたいなものを托した。

曰く

尻餅で天下揺がすオマザかな

これを見た木堂翁は莞爾として、
「内田に逢ひたい。嬉しい男じやのう」と云つた。

俳句

吉里竜耳

ホストン雜詠

たゞ喰べて晝寝の回数づくかな
川べりを鯉上りゆく暑さかな
新涼や川面を渉る加州風
磨ぎ惱む炊る烟や秋晴るゝ
造花とは見えぬ花輪や秋の風
山の幸石のたぐいや背負いつゝ
大砂漠や月は東に日は西に

三枝

うらゝかな日の色染める花錦
秋草の風になまめくくす尾花
家根船のすだれゆかしき眺めかな

療院吟

谷澤俊治

病人も少し粧ひお元日
看護婦も醫者も交へて初寫眞
木枯に詭しく暮るゝ丘上の療
冬の日の射してはかげる療の窓
木枯や比羅に退院人送る人

島原潮風

背を出して動かぬ鯉や春浅し
春たちや大蠅廻るメスホル
囀やダンスのすみし二世ども
更くる夜のブラック光る月夜かな
春うらゝ永炭焼く煙白く見え

汽車に詰め込まれて来たお前は

自家に歸りたい!

ロス アンゼルスへ行くと言つては

幾度父母を困らせたか知れなかつたが

よく炎熱地獄も生き抜いて来てくれた

大分瘦せたお前ではあるが

病氣にもならず

かうして毎日幼稚園に通ひ

砂漠の中の生活をも喜ぶやうになつたので

父はどんなに嬉しいか知れないのだ

× ×

いとけない女童よ・幼い吾子よ!

此の變つた生活を深く記憶してゐておくれ

おそらくお前の末永い一生涯にも

二度とはくりかへさないだらう此の生活だ

そして父母と共に神さまに祈りませう

お前の描いた山の上のいびつな太陽が

大きくまんまるくなつて

全世界の人類の一人々々の胸々に

平和な光を注ぎ込む日の

一日も早く来るやうに

(一九四二—十二月

アリゾナのリロケーションセンターに於て)

詩

不正形な太陽

外川 明

此紫色の嶺山から

いびつな朝陽が昇るところの画だ

山裾にはモスキッドの緑樹があり

空は一色の青で

今年五才の吾子が描いた色鉛筆の画だ。

X

X

毎朝毎朝暗い中にゆすぶり起され

寒くても食べなくてはならない朝食の

熱いココアにしがみつく小さな赤い手

そして朝食の渾んだその後

部落外れの空地の焚火の輪の中に交つて

東の山から昇る太陽を

朝な朝な観てゐる幼い頭脳に

何時しか砂漠の自然も溶け込んで

かうして稚い画になつて現れたのだと思へば

吾子よ！ お前のいぢらしさに

心弱き父の臉は熱くなつて来るのだ。

何処へ行くとも知らずに

長い長い砂漠の旅を

シマリイテンポルの人形一つを抱いて

砂漠民謡

高橋東民

二度と住まいアリゾナ砂漠
十八娘が陽でこげる

大和撫子砂漠に咲いた
手折るまいぞや色香がうせる

メスの朝鐘カンクなつて
寒い夜明の細道走る

色の黒いは自慢ぢやないが
わたしやアリゾナ砂漠の育ち

赤いはげ山小雨にぬれた
植てやりたや桃櫻

雨よふれ／＼砂漠にふれよ
降れば若草みなもえる。

民謡

クル／＼と
胡仙

一ア軒にさしてゐるあの風車ヨ
誰を待つのかクル／＼とヨ

ニア主を待つのかスラック娘ヨ
肩で日傘をクル／＼とヨ

ニア辻のあの娘は誰を待たうか
可愛い眼玉をクル／＼とヨ

四ア寒さ忍んで主待つ門にヨ
長い首巻クル／＼とヨ

五アお前待ち待ち夜風に吹かれヨ
廣いブラクをクル／＼とヨ

六ア主を待つ夜の日本着姿ヨ
長い伊達巻クル／＼とヨ

詩、收容所の乙女

英紗子

28

午過ぎの冬の陽が
悠然と眠りにさそう

ベンチを出して語らへるに
灰色の虚空が二人の間を
流れてゆく。

白い月夜のライド
チユリツプの花咲く公園の散歩路
音楽會の夕、等、等、
フキルムの如く二人の想ひ出は
展かれど

あゝ男はあくびをかみころして
ポケットに手をつつこんだ

結婚する氣にもならない此の頃
乙女はちつと破れた壁を
子切つてゐる。

アリゾナの月夜

惠美須

アリゾナの月の夜を
そよ風に吹かれて、
はるかに君恋へば。
たのしい思ひ出。

星光る夜空に

ハモサの浜辺

月の冴ゆる夕

ベニスの磯風に

君が呟き言葉

この胸に潜めて

またの逢瀬までは

やる瀬ない思ひに

今宵の月の光

君もともに見なん

アリゾナの月の夜を

そよ風に吹かれて。

自然から受ける慰安、風光が與へてくれる慰安は大きい。
自然は私どもの情操をうるはし、愛情を育て、あゝの灼熱に
アリゾナにも思ひがけなく雨季があつて、あの灼熱に
ひしがれた私共を慰藉してくれてゐるが、又一二ヶ月も
立つたらあの色のない。夏がやつてくる事であらう。

隨筆

身後の身

野田夏泉

「五十にて四谷を見たり花の春と言ふのが嵐雪の句にある。江
戸に住んで居た嵐雪は齡五十の時初めて四つ谷を見物したと言
ふのである。其れは悪いと云ふのではないが吾等の手近にある
ものも應々にして氣が附かなかつたり、迂闊に見逃したりして
居る事が多い。

夏目漱石は田舎道を通つて微風に揺れる苗代の苗から米が出
来る事を知らなかつたり、苟も竹も知つては居るが苟も成長し
て竹になる事を知らない者が東京辺にザラに居ると正岡子規は
墨汁一滴の中に揶揄してゐた事を覚えて居る。そうした事實は
其処此処に在りはないか、ピーナツ（落花生）の土中に實を結
ぶ事、バナナは上向に結実することさへ知らない人の多くある
ことを思ふ。

廣いやうでも狭いのが人間の知識である、それと思ふと我々
が各々諸方の収容所に入れられた事も或一面幸と思はなければ

隨筆

自然の慰安

久留島英紗子

30

此処へきて私は空を仰ぐ日が多くなつてきた。

早い朝食をすましてかへる途中、夕食後の一とき、

空の美しさ、雲の美しさにしばし佇んでゐることがある。

向ふの巖山の上が少し白け初めてから、桔梗色に、柿色に、

そして陽がすっかり出るまでには、雲の色彩、雲の形態は

様々に変化してゆく。

朝雲から受ける清澄な快よさと違つて、あかい夕陽に

映えた雲は何か爛熟した様な憂鬱をあたへる、それが灰色

に、黒に変つてゆくのをみつけてゐると、地殻に足を吸は

れてゆくやうな悠久な孤獨的な寂しさが、そく／＼と

迫つてくる。

雲と同じやうに、此の頃の山も亦美しい、收容所を囲む

四方の山々は一日中種々な色に変つてゆく。光線のかもし

出す巖山の起伏の陰も美しい。

私は子供の頃よく雲をながめてゐた。

一人殻の中にこもつて、寂しさと悲しみをかみ殺して、

其の雲の中にお伽噺のやうな空想を描いて、誰も知らない

秘密をたのしんでゐた。

創作 別れ路

愛州ハント

村岡鬼堂

美子と隆とが知り合つたのは、盆景の師範玉泉女史がシャトルの市民協会ホールで教授するやうになつてからだから。恰度二年半前の晩夏だった。美子は歌心がある為、盆景に應用する苔や小松を採りに、夫の車で逢々七十哩もある、ヤマゲードやレニアの山中に分け入つて、造行つて探がして歸つては、山家や谿流の景の縮図を作つては、先生に褒められた。隆は科學する心から、小さな盆景に極小形の変圧器を附けて、レールを敷設したりして、玩具の汽車を馳らせたりして是亦、其独創を先生に賞められて、お互ひに弟子達の中では新人を以て任じてゐた。湖の対岸で土に親んで生きて居る美子は、戒多に出市する機会が無つたが、一度、日曜の佛教会参詣をサホつて隆と逢つて、藝術を語り、詩を論じてから、隆の斯道の造詣の深さに、尊敬の念さへ起つて、夫れが聴ては愛情にと進むのだつた。隆とて、其通りで美子の歌道研究の深さに、其鳴する所が多く、其後機会を作つては会つてゐる中に、段々愛情の濃やかになりつゝ、あるのを自覺した。二人は夫と妻があるに關らず、満されぬ或る空虚がある家庭生活に倦き足らず生き續けつゝ、あつた頃として、何れからともなく、其愛は深まり行く許りだつた。去年の五月中旬、隆一家はピヤロップに移されて、グランドス

ならない。彼のお正月の餅塙などそれではなかつただううか、糯米を蒸籠(セロウ)で蒸し、木の杵で搗けば餅になる事をも二世の中で知つて居たものは何人あつたらふ、都會に住み一枚一帋で毎年お正月餅の注文取りに來る家庭の子女には嘔驚異であつたに違ひない。

アリゾナの氣候、コロラド河流域の地質、草木、生物、我々初めて見たものが可成りある、アイオン樹、メスキート樹、棉花、蠟(サリ)、鈴蛇、数へあげれば数なくない。加州ばかりに居住して居た者には新しく體驗したものも数限りない。之は一つの尊い體驗である、雨に風に嵐に我等の見界は廣められて行くのである。

精神界に於てもそうである、我等の氣がつかなくつたこと、等閑にして居た事の多くあることに氣が付く。今の境遇は實に吾等內的に廣く聞き深く視、以つて品性の向上に精進すべき好き機會である。

口には愛國を唱へ乍ら主義を履き違へ、二世指導、人道、道徳を叫び乍ら、二世には聲威を逞され、人には反感をかぶやうな人も吾等の眼に立つ。

今は靜かに禪僧の坐禪修行の心構で、内に反省し、外に善行を積み、收容を修養に代へて自重すべき時ではあるまいか。達人は物外の物を觀、身後の身を思ふ(某根譚第一章)なる句の尊さをつくつく思ふ。

願してゐた。外出願が申届けられて、愈々單獨で農園労働に興
く事になつて、明日お登といふ前夜、護し合はせて。美子のグロ
クのリクリエーションホールで逢ふ事が出来た。公衆の建物で
の出會ひは何時人が来るかも知れず話もろく／＼出来な
秒一瞬と経つばかりであつた。何れからともなく執り合つた手
は温かく何時にかに抱擁は續けられ室ね合ふ唇は離れる時がな
い様に見える。灯を消した窓からもう朧月が丸が射して居た。(完)

悪い虫

恒吉盛花

此頃私は、新の代用にもなりかねる杖を切りに行く要の病氣
に罹りました。三ヶ月ばかり毎日山通ひを致しますと、一本程
天下の絶品と折紙を附けらる、程の、名杖を得ました。これな
らば三途の川も、死出の山も、大丈夫越せる自信がつきました
から、なまじ浮世で苦勞するより一層の事、死んでアノ世へ旅
立たいと決心致しました。
さて愈々去るとなると、浮世も誠に名残り惜しいもので、
か置き忘れた物はないか、心残りはないかと思ひ廻して見ると
憂世にも去り難い思ひが、一つありました。
私は五十近くなる今日まで、誠にお恥かしい話ですが、未だ
一度も恋をした事がありません。ですからせめて浮世の名残り
に、又アノ世への土産話に、恋を一度だけして見たいと思ひま

タンド下の六暗生活を續けつゝも群部の爲に遙か加州のツ
ラ湖畔に移されて行つた美子の事のみ思ひつゞけるのだつた。
遠く離れては盆景を見せ合ふにはやがず只歌にのみ其
藝術気分を表現し自分達の境遇と変らざる愛の表白をつい
けるのだつた。八月半にアイダホの曠野たるセージのみの砂漠
に再び移動した。陰は日毎の拭いても拭ひきれない砂漠
風の中でククスを採つたり釣糸を垂る。固にも美子を
思ひ諦むる事は出来なかつた。其中に美子の夫の弟達が
トに居るのと同居したいと言ふ請願を聞き届けられて突然加州
の氣候のいいキャンプから砂漠の中に移つて来たのは夢か
と許りに驚かされた陰だつたが其の喜びはたとへるにもの

無かつた。同じキャンプに暮すやうになつての二人の間は急速に進ん
で行つたに俟たず嚴格な倫理と古風な躰とに育てられた陰は五
十を過ぎた今日でも愛の告白をする事は悪事をするかの様に
考へて自分で激發しきうな愛を矯めつゝ過して来た。美子も
親が修身の教師であり且地方的の女子の監督が厳しく一人
では晝夜雖も出歩かせず男との接觸は山田がアメリケから
歸つて結婚する迄全然無かつたので其の戀愛を知つたの
は四十に午がとくやうになつたのが初めてはあるが是亦
心は火と燃えても其告白を斬断しざるのだつた。正月過ぎた頃に
慌だしく戦の第二年月も暮れて正月過ぎた頃に陰は豫て請

實話短編 善因 善果

溝口 生

千古の謎を解めて婉々として流れる太平洋沿岸第一の大河コロンビア河の河口に世界第一を誇る製材所をもつて名高きロングビュース市がある。

話は約十年前に遡り此処に就働してゐた一日本人光藤某といふ人の出世実話を直接聞きたし記憶を辿り照會したいと思ひます。光藤はある日曜近所の町でBと云ふ大きな家具店で三弗^ニにがしの買物をして五弗紙幣を出した処店主はラツシユア^一の爲め釣銭として十六^弗余の金をカウンターの上に並べて、

どうもありがたうと光藤に渡さうとした。光^カテ御主人私は貴君の店で三弗余の買物をして五弗出して十六弗余りのツリ銭を貰ひますと大変な儲けとなりますが然しあなたの方で損が行くと思ひますが、と軽く笑つて見つめた。老主人は慌て、今一度キマシレダスターを調べツカと彼の処へ引き返し光藤の両手をシツカと握り暫らく無言のまゝ、光藤の顔を見つめてゐたが徐々^ニに口を開き、店主^ヨ敬愛する日本人よ！私は東部から遙々此新開地に一儲けせうと思ひて來ました。かねてより日本人は世界一正直な国民で盗など決してしないと云ふ事を聞いてゐましたが目の当り其實証を貴殿によつて見せて貰ひホト／＼感心致しました。と語を切つて店主突然ですが一寸お伺ひしたい事がありますから危支へがあ

した。その御面相で、その年で、本気の話かぬ、とお尋ねの方
もありませうが、一休和尚さんでござへも、人間は灰になるまで、
色気は消えぬものと、言はれた程ですから、まして凡夫の私
ですもの、本気に間違ひはありません。その気持を友人に話し
ますと、一生の思ひ出だ恋は大いにやるべしと、けしかけられ
ました。それで私は、太った女の候補者を一人見出して、彼女
に恋文を送りました。

心なき草花も春に逢へば笑ひ、情なき虫も秋に感ずれば泣く
魔風恋風身にしみて、朝な夕な忘れかたなる君の顔、色好い返
事をくれ給へ、と思ひの文を細々と書いたのに、彼女からは
何の便りもなしの飛礫です。仕方がないから私は、彼女に直談
判をしました。始めての事で、胸の思ひがすう／＼と口には出
ませんが、真心こめて、色文にも書いた通りだ、わしは惚れ
たけん何とか返答をしなければと云ひますと、惚れたとは何んや
と彼女が云ひます。惚れたと種類があるものかと云ひ返します
と、馬の小便は地がほれる、お山に行けばト口、諸がほれるよ
と、彼女は鼻であしらひました。此奴、海千山千の剛の者で
なかく、一筋なわけでは口説き落せる代物でないと、思ひまし
たから、又友人に相談に行きますと、
「エーはあの太った女に惚れやうとしたのか、あ奴は駄目だよ、
悪い虫がついて居るからぬ、
それで私は、当分の間アノ世へ行く事を見合せました。(完)」

早速取引先に行つて話をつけておきませう。

それから支那人を呼んで何か云ひつけた儘店の忙しいのをも省みず、光藤を伴ひグロサリ一店ジユリ一店金町の目ぼし、一店全部をかけぬぐり同此の日本人は私が世界中で一番信用してある人で今度此人が日本船へ品物を入れる事になり予したから私が後見兼金主をする事になつたから此の日本人が入用の品物は何でも出してやつてくれ、其取引に就ては私が万事責任を負つて一仙の損もかけぬから」とつれ廻られて全く恐縮して気恥かしかつた。その後日光藤氏が筆者に物語つた事でした。

當時此事が全地の英字紙に大々納に紹介され、白人間に信用を博し日本人は非常な好感を以て迎へられ、それがためか当時病院に入院中の高給船員と白人看護婦との間にローマンスまで生み出す様な副産物があつた。

光藤某の商賣は各方面より便宜を得て好調に向ひ相當の金儲けをして近年は九州ホートランド附近に百姓をして居る様子であつたが今はアイタホミネドカの転住地へ來て居る事でせう。(終)

優れた川柳

東京きやり吟社主幹村田周魚

優れた川柳を作ると云ふことはな感激を与へるものである。作家にとつて大きな喜びである。しかし此優れた川柳を作ると云と同時に、讀者にとつても大きな事の中々容易でない。見たこ

リませんでしたらお這入り下さいませんか。と光藤を事務所に招き入れて、店主「サチエが他人種でしたら黙って喜んで行きますから大損をする処でした。私が此店の主人。ジヨンデヴィスと云ふ者です。何卒宜敷く………時に貴君はヤハリ製材所にお勤らさいますか？ 御家内や子供サンは？」

光「家内と男の子二人と女子四人の多人救です。から私一人稼いではやつていけませんので家内が人の洗濯などして漱やく渡世してゐる有様です。」

店主「ソレハ仲々のお骨折りです。甚だ失礼ですが貴君は何か商賣をおやりになる考は御座いますせんか？ 兎に角金儲けになる事を………？ ソレについて口ヤツタイ事を云ふ様ですが今日から私はあなたのベストフレンドとして私の出来る範囲に於て何でもしてあげる金は無期限無利息で用立て、上げるから何かイ、考へはありますせんか？」

と云はれて光藤は狐にでもつかまれたかの様に暫らく呆然として居りました。が世にも親切な白人もあるものだと思ひ、感激して光「ソナに云はれると以前から一つの希望をもつておりました。御承知の通り此港へはよく日本から材木船が入ります。あれに食料品や土産物を賣り込めば相当の事になると存じます。店主「実にイ、考です。是非おやんなさい。」

光「それでは何れ亦………」

店主「何れ亦ナンテ悠長な事でけ商賣は駄目です。善は急げです。」

[illegible]

と、感じたこと。句席に在つてかりと掴む事である。料理の上の出題を五七五とまとめること手な人でも材料が無くては料理は考へやうによつては容易であにかゝれないのと同じに、本能があるが、さて優れた句となることをしつかりと掴む、即ち材料をつかひ。句席に於ける高品位になす力量を勉強する事である。の句としても、それは集句の中それが出来ゐるやうになつたら表を定めたものを選者が発見し順位の現の方式を研究する、一から二級があり又選者其人の心構えに良い作家として立つ事が出来るも其抜句の上に差のある事を知るので、空っぽの内容を文字や枝つておかぬべならぬ全的に優れた巧によつて胡魔化さうとする軽たものを、其処にむづかしさが業川柳など作つてゐては一時がある。それだから作る張り合ひ的の喝采を博すばかりで永い生があり又楽しみも多いわけである。余がない俗の眞を生かす川柳が然らば其優れたる句を作るには徒らに向ふをけさうがへて如何にしたらよいかえもむづかの羅列遊戯にならぬやう、手先しい、質問である。初歩の作家きで詠まふ心で詠つてもらうたとして先進作家から、たゞ良句を作れと云はれても、其処にある道を示してくれなければ、たゞの五七五よりまとまらなその道は先づ感動の本能をしつ

(一九四〇四月号南加川柳より)

佳作（つゞき）

ホストンに会けた、シエラの山の色
生え出で、柳に砂漠色を添へ
ホストンの名、何マサナうならせる
ホストンのスタイルらしく飾る家
ホストンの明日へ生きたる老夫婦
ホストンの山の起伏を見る涙
おもむきよ宵のキヤンプの灯を眺め
あ、綺羅月夜の夜に見るホストンは
ホストンは思節の在ります所なり
ホストンの二世時局で中利かし
ホストンの三々何時でも興味が飛ぶ
ホストンに東洋人の草花が建ち
ホストンの氣候で不満、総て忘れ
ホストンの埃の壁に思節の土声
ホストンで二世文化の技能見せ
支那の夜むくホストン秋の夕
ホストンに名所が散る池が出来
アノ君も此はホストン大芝居
ホストンで個人主義的な物を分け
ホストンも同じ、同じく夜の宿
ホストンと聞て無沙汰へ友の顔

巴水 狂月 王國 雪嶺 素人 栗川 如骨 寺泉 守平 汀人 秋風 鳥城 島本 軟葉 潮風 浪音 松峰 絲雨 水影 三川

43

南加川柳の思ひ出

ホストンの埃を浴びて秋祭
夢にだに見えりし今日のホストン市
偉ホストン明日へ生きたる試練場
ホストンにナセ文字の命目が出来
収各所あつてホストン名を知られふみ子
遊び場を占領されて泣くカヨテー
ホストンの生活此腹板につき、凡才
スガリと忘れる様に友と飲み無声
深々と更けて己れの土声に聞く其
苦しみも理解に生きたる共稼ぐ鳥城
あの元氣をさすがに決る儼然旗巴
ドラまでをくぐり、話す国訛り潮風
鳩時計更ける話へ時刻を告ぐ大洲
古銀け馬屋に掛けて三ヶ日、白雀
いらした気持、ピアノへ愛をやりハ
面影を偲ぶ切手へ国の父、桂南
両生を信じてお女がよく仕へ、史朗
月踏んで此処まで来し分れ道、凡才
あこがれて訪ふ瞬間かるく悔ひ、溪山

ホストン文協川柳句會日十月三十五日

課題「ホストン」

互選

天位

富田虎山

ホストンの雲へ嵐の穴を開め

地位

宮野大海

ホストンを銭かものした皮虎の光澤

地位

鶴巻南須屯

ホストンに残す世紀の足の跡

人位

富田虎山

ホストンのクマシ陽焼の肌を見せ

人位

竹下ゆづる

ホストンの試練遵守し明日の旅

人位

藤原一葉

ホストン市同じ家並で低く住み

人位

巴水

ホストンの歴史へ大地強く踏み

ホストンの生活文化に遠く居る

ホストンを巨魁にして朝陽を拝む

砂埃吹くホストンを趣味に生き

ホストンの水にも馴れて皆達者

素素裸のままホストンで秤られる

42

柳友が居てホストンも近くなり

ホストンに墓標残して友は逝き

民族の誇りを二世此処で知り

更生の意気か二萬を助け合ひ

ホストンの生活其の後が安んぜられ

ホストンの昔を語る時を待ち

春秋五すホストンに來て百反を知り

思難言を過去に解け合ふホストン

ホストンの無性に伸びし影面を持ち

佳作

ホストンの町は家主が一人なり

日に青へ染むホストンの住心地

ホストンの殺風景に句を見り

同胞の汗ホストンを開拓し

ホストンのニース開けば砂が落ち

エアに見て然るある今日のホストン

エア持つて学校通ふホストン市

ホストンもアメリカかなと老母は云ひ

ホストンの長屋同じでケト迷ひ

ホストンのあかざ珍珠と喜ばれ

ホストンの試練を語る加子南瓜

ホストンの生活を生かす河が出来

道子

五松

牧東

紫水

北村

生香

村山

牧東

次彦

溪山

大海

幽香

悟苦蘭

鏡水

箕人

静江

文子

眉山

一路

北村

紫水

川柳

砂漠の華

片山幽香

待つ友へ煙草二本が無駄になり
我宿を今日も悩ます砂漠風

竹下ゆづる

手にシズク新生命の味の

拳骨が友の情と知つて悔い

富田虎山

迷信の離れぬ夢が氣にかこり

肩書へ友の言葉をも改まり

菅野大海

雨鏝を胸に置込んで待つ平和

涼風を待った窓から蚊が入り

石川凡オ

友の計を聞いたキャンズの灯が寒い

山犬の声へキャンズの夢が醒め

二万人ホストの水呑みこなし

矢形溪山

環境の一致並みの友が出来

出発の基点が違ふ廻り椅子

無事でさへあれば兎も角キャンズの灯

ブラック三十七川柳會

作品

祈る兄の姿尊く胸を打ち盛花

年の功事女は顔讀む術を知り

戦塵を喚かす春氣にかスス又電耳

元旦にこたわりもなく石磨き、亜州

ホストの風呂場に急ぐ下駄の音日

産院を出る兄に笑顔寄り集む毫百

ホストの閑日月へ噂とび

聖水

兄の幸を日毎に祈る親心

軽口にかたる噂にふり込まれ

歸り待つ妻は夜なべも手止らず妙

苦しさに思ふ者もおのづと手を合せ

釜の前三度廻れば日が暮れる

女風呂世間話に花が咲き

西

シヤワの音互ひに声が高くなり

雪女

空姿よし兎角噂の種となり

盛山

数人に聞いた噂が玉の輿六

干城

呼びとめてお顔を見れば人違ひ

明星

つまづいた石がとりもつ縁となり

太湖

川柳

砂漠の華

安元時子

インターンされた夫を待つ茶碗

川端眉山

便り待つ母安せられ

恒吉盛花

エタへ行く子の背へ母は涙ぐみ

川島次彦

唯無事と短い文に母見入る

鴻巣南須宅

水腹は朝寝の四討と観念し

山西里江

小半日待つて正受取るべの願

島原潮風

十二弗世貞の娘の列はかどらず

藤原一葉

法名を大切にして汽車下にゆれ

北村北村

雨雲を遠く眺めて水を撒き

河内汀人

平和待つ無駄を毎日くり返し

鈴木胡仙

待つ母へ幾年月の今日も過ぎ
待ちあきし夫にすねる鏡をかり

久能一路

珍らしい宝生見つけたり砂漠の夜

水畑素人

珍客を水で待遇なす収容所

無事と云ふ母の齢が氣にかゝり

清水寺泉

逢ふ度に子供殖えてる友の皺

水鏡細つた顔を撫で見る

山田如骨

住む程に砂漠の町も青となり

友情が小サ蔭で語る仲となり

柳生緑雨

友来れど番茶も汲めず假の宿

人生の再出奔へ白毛決め

野田鏡水

遠ざかる羅府へみんなの煙がうるみ

お達者で亦逢ひませう汽車の窓

あるものなのも同じ水で生き

ホストン文協川柳初句會

課題 新年雜詠

天位

水烟素人

地位

内堀山人

国恩の普く及ぶ雜煮餅

人位

野田鏡水

新しい年へ希望の陽を拝み

客

竹下ゆづる

新年の御慶は他人めて述べ

客

久能一路

明けまして兎にも角にもお芽出度う

客

矢形溪山

元旦へ犬は剃つて無精髭

客

水打一介

動乱へ遠くキヤンプの杵の音

客

川原抑天

元旦の焚火を背に聞く抱負

客

菅野大海

年賀宴客淋し顔でお茶を飲み

一月十日

石川凡才選

木乃

一と切の餅へ感謝の箸を採り時子

新年の気分をやと餅で出しみよ子

赤裸で年始を交すアの中一路

戦勝の気分もまた餅を喰む野菊

正月と云ふ名丈なりホストン市

収容所一年の計定まりず盛花

自作画のハカキで足した年賀状

あるもので祝ふキヤンプのお正月

鼎然と和平を祈る新春は明け素人

分ち合ふ雜煮時局へ満ち足りる東

酒力な不平を餅であきらめる汀

餅丈に正月が来た転住地時子

お鏡をそなへて兵の子を祈る雪女

配給の服も足りぬお正月みよ子

燦爛と昇る初日に感無量胡仙

御無沙汰を詫ぐる年賀筆を精ゆつる

転住の新春へ感慨無量なり

ブラック十九 川柳火曜會

46

如骨

風向に思ひ林火の煙を逃げ
夏情子氣になる秋の風が吹く

次彦

動く世の歴史に小さう俺も居る
独りぼち釣れな竿に赤トビ

牧東

新妻へ急ぐ歸りの軽い靴
息子の便り老眼鏡へ午がふるへ

里江

世をすねて独り異郷の旅に生き
停電へ困る風呂場の丸裸

秋月

かたくなも厚い情に動かさぬ
風呂歸り隣同窓で月をほめ

昭女

立退と知るか犬も格付かず
強き意見するにも困る壁隣り

作品

碧水

頼まれて後には引けぬ男意氣

老人

最後だと差上げて見る徳の底

香風

白晝眼鏡かけた姑の恐い顔

月見草

鳴る鐘の合図で動く長屋連

はぎ

統制に破れた靴が甞へり

苔石

探してる眼鏡額に置忘れ

無角

老夫婦眼鏡一つで事が足り

トモ

腕時計動いてるのか腹の減り

甘露

食堂の鐘に隣を誘ひ合ひ

一郎

小包が来て古靴へ暇をやり

第十回文協川柳句會

課題 顔

互選 二月七日

天

河島次彦

義理知らぬ顔が横丁へもれて行き

地

中山各風

憶蓮を笑顔で受ける太い肚

地

鈴木胡仙

我がものとなつて素顔に皺が見え

人

竹下ゆづる

新顔へ活題をかへる時局談

人

水畑素人

争へぬ小皺寂しい牡丹刷毛

人

北林静江

顔見れば又要談言ひぞびれ

客

富田虎山

お願いのある顔久し振りに来る

全

土屋栗川

相談の顔へ巧な豫防線

全

片山幽香

月給目みんな嬉しい顔の列

客

此素水影

玉の興ねらつた顔が嫁きぞびれ

全

野田鏡水

眞剣な顔とすれ逢ふ暮の街

全

津村汀村

若き日の妻によく似た娘の笑顔

水乃

稲垣牧東

キマゾ中顔がうれてく太い肚

全

人見小夜子

心にもない寄附金へ顔を立て

全

山田如眉

顔も手も泥で来る兒の御飯時

全

関野五松

五十年の苦を語る顔の皺

全

松井竹葉

顔よりも心へ嫁ぐ娘の果報

以下裏面へツク

川柳初句會 一月十日

天位 席題 準備 水畑素人 互選

更生へ裸になつて身構へる

地位 稲垣牧東

將來へ準備の出来ぬ世の動き

人位 片山幽香

雨國の準備時局の波に命ひ

佳作

將來の準備へ老の身をはげみ盛花

準備した歸國敵なき夢となり栗川

平和後の飛躍の準備胸に燃え一路

小心が見逃しもない準備する次彦

準備して出所待つ間の朝の霜竜耳

準備する針へ大公望の夢虎山

新春に再興準備の安を練り大海

計画へ準備の足らぬマテリアル汀村

食堂の準備出来ぬに式がすみ如骨

心身の鍛治も明日の春の爲めゆづる

出立の準備が出来た煙草の輪凡才

雨國の準備へ腹のへりエ合 溪山

天位 水畑素人

雨だれの音寒々と炭を足し

地位 山田如骨

世話のない生活へ雨の音に寝る

人 稲垣牧東

雨の音静かに聞いて暮へ座り

佳作

土砂降りへ急げばするメスの鐘溪山

亡き母の中道言ひ少く小糠雨ゆづる

たまやかの砂漠の雨を懐かしみ虎山

雨の日へ母の苦勞はつ殖え幽香

俄か雨空を眺めて兒を安んじ一路

初時雨祖母の手をとるぬかる道秋月

雨雲を笑つて笑つた山豆里竜耳

少々は濡れても好いと持合今栗川

ホストの少雨も倦きられる汀村

待ちかねた雨も泥靴もてあまし大海

雨曇り西村府の景色が便はるみ子

食堂へ生きねばならぬ雨を突き凡才

文藝云投稿に就て

創作詩、俳句、民謡、隨筆、其他文藝類

誌への投稿は毎月末日を以て結算
切ります

短歌は毎月二十日締切一人二首
川柳は隔週句箋によりて発表す

原稿は楷書にて住所姓名ともに

鮮明にお願致します

宛名
文藝協會
フ
フ
四
六

一

川柳句會 二月廿一日午後一時半
歌會 二月廿八日午後二時

報
告

安高きち

永
來
魚

柳
本
錦
子

大池
智惠子

右の諸氏より金部封宛文藝協会へ
御寄附下さいました事を感謝致
します。

ポ
ス
ト
ン
柳
壇
本
年
度
得
点
数

宿題
二月七日マテ

席題

鈴木胡仙	竹下中る	水烟素人	安元時子	久能一路	野田鏡水	富田虎山	山田如骨	高橋東民	津村江村	船垣牧東	菅野大海	工屋栗川	岡重洲	川端眉山	島原浪音
二	一	〇	〇	九	八	八	七	五	四	三	〇	九	八	八	八
牧草	幽香	凡才	素人	虎山	如骨	溪山	思る	栗川	一路	大海	竜耳	次彦	江村	谷風	盛花
みよ子															
五	五	三	一	一	〇	九	七	七	七	六	六	五	四	四	三

冊誌は維持会員に限り一部十五仙

以下記錄

佳作

十年の苦勞を秘めた父の顔、讓次

器量よく生れ長屋に落つかず 紫水

顔を立てやつと縛へ鳥がつき 牧東

其まこの顔がやさしい村乙女 聖水

一世に見ゆる苦勞の顔と顔 壽泉

勤勞へ笑顔の母がゐてくれる 陽子

大砂漠我もの顔の化石狩り 東民

薄化粧散歩の顔をのぞかれる 時子

色白へくつきり生さる娘の顔面 眉山

借金をしてから遠く顔馴れ木 夢アニ

まゝ母の顔へまめらふ娘の顔ひ 里江

羞じらへる娘は美しく耳を赤あ童耳

煤拂ひ顔見合して笑ひこけ 晩香

あゝ、やうを顔一はいに見せて幕 太胡

顔付に似ぬ文才が天に抜け 大海

初孫へ笑ふ七十年の顔 亜洲

俳優へ顔相当の役が付き 雛羊

悲しき兒に似てる笑顔を抱きしめ 流葉

八木くちり悪さをし女顔 白峯

言ひ介を譲つて人の顔を立て 青山

亡き母の顔を見つめて夢がさめ 雪女

平凡な顔で哲学者博士なり 一路

だんまりで女と病む子の寝顔見る 潮風

横顔の子の汗滴す女は見ると 浪音

よく似てる顔へ横目をする目暮 秋風

顔なじみ文に少しは引く値段 夏子

顔役のやうにも似くメスの席 西湖

古曆	四十二年の	感無量ゆる	繰る曆	日取りへ父の	婚礼の 北治子	〇印	判る曆の	俺丈に 虎山	繰つて見る	今年の運を	新曆 昭女
----	-------	-------	-----	--------	---------	----	------	--------	-------	-------	-------

FEBRUARY

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28						

三月三日

ノ切

二句凡才選

男

一句互選

家具

川柳課題

二月二十八日

歌會

二月二十一日

川柳會

編輯部屋



◎へなぶりに

月給が来る

転住地

「求めよさらば與へられん」

の聖句この砂漠の中に實現して
こゝに文藝誌を發刊し得た事は
ホストンに於ける大きな喜び
であると信じ、心臓強く樂屋か
ら太鼓をたゝきます。

○土百姓ホストンに來て

ペンを採り、

ペンを持つよりホーニングを
やる事の上手な編輯員私が文藝
同人よりの投稿作品をホストン
長屋式に並べありくと百姓の
お手際を表はしました。

何分にも暗の緒切つて始めて
の事ではあり館府生活の不自由
に加ふるに統制下にある現在借

リ物々有り合せ物で誕生した
世にも憐な文藝誌であります

右様な都合で折角の寄稿の一部
を次号に割愛した事を悪しから

ず御承解を願ひます。次号は全

人諸君の批評と教導によりてよ

り良き冊誌を發行したい念願に

燃えて居ります
未筆になりましたが本誌編輯に

当り勾友富田虎山君の多大な援

助を受けました。
○手不足へ友を引き込む樂屋裏。

モーツ本誌はホストン俳教寺の
機械でお経の声の中に生れまし

た全寺皆様へ御世話になりました
た尚表紙は久留島英紗子女史の

作、ホストンの記念であります
こ小羊の方々へ皆様感謝の意を

表して下さい。
○うめば川へ次号こそけのペンを掲ぐ

一九四三、二月 凡才

昭和十八年末歳

LABOR RELATION BOARD UCO

POSTON POETRY

CLUB

Block - 46

ポ
ス
ト
ン
文
藝
俱
會

ブ
ラ
ッ
ク
四
十
六
区
ホ
ー
ル

一
九
四
三
年
二
月
十
五
日
發
行

五
十
五